

## 平和を願って

校長 鈴木 隆志

8月に全校登校日があって学校便りも発行していれば、日本中の多くの学校で平和教育が行われ、校長からの平和を願うメッセージを届けることができたでしょう。広島市では昨年度まで半数以上の小中学校が8月6日を全校登校日とし、黙祷を献げ、平和の学習をしていました。長崎市では今でも全小中高が8月9日を全校登校日としています。東京の学校でも、かつては夏休み中の全校登校日がありました。私が小学生だった頃は、確かに全校登校日がありました。体育館で、市川崑監督の映画『ビルマの豎琴』（昭和31年）の上映会があったように記憶しています。

光が丘児童館では、毎年8月15日の終戦記念日に「平和祈念行事」を行っています。素晴らしいことだと思います。光が丘の地は、戦時中は「成増陸軍飛行場」だったのです。

私が小学校6年生だった昭和42年の夏、映画『日本のいちばん長い日』が劇場公開されました。私は何も分からないまま、親に連れられてその映画を観に行きました。白黒の画面でしたが、戦争の恐怖、悲惨さが胸に刺さり、泣きだしそうになったことを記憶しています。私の父は、海軍兵としてトラック諸島に赴き、戦地で終戦を迎えています。終戦から3年後に、日本に帰還しました。父は、戦争の状況について、多くを語ることはありませんでしたが、50年前の夏の日、私を黙って映画に連れて行ってくれたのです。父親として、親父の背中を見せたかったのかもしれない。

『日本のいちばん長い日』は一昨年リメイク版が再映画化されましたが、昭和42年版の監督は、岡本喜八氏です。岡本監督は、翌昭和43年に全く傾向の違う戦争映画『肉弾』を公開させました。中学生になった私は、今度は自分の意思でその映画を観に行きました。岡本監督の遺した手記には、“『日本のいちばん長い日』の欠落した部分は、『肉弾』で埋めなければならぬ。『肉弾』は岡本喜八そのものである。”とあります。『肉弾』は、かけがえのない命を落としていった庶民や兵士の姿を描くための映画だったのでしょうか。

『戦場のメリークリスマス』の監督、大島渚氏は、“敵国を平等に描かない映画は、反戦映画ではなく賛美する映画になる。”と言っています。『火垂るの墓』の監督、高畑勲氏は、“『火垂るの墓』は反戦映画と評されますが、反戦映画が戦争を起ささないため、止めるためのものであるなら、あの作品はそうした役には立たないのではないか。”と語りました。戦争を体験していない私は、戦争の映画を観ることで、同じ過ちを繰り返してはいけないという思いを強くしていったように思います。映画だけではありません。ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディラン氏の楽曲『風に吹かれて』も、ザ・ビートルズの一員だったジョン・レノン氏の楽曲も、私の世代の時代を反映したものでした。

光っ子たちは、平和を願う心を養う国語科の学習として、3年生で『ちいちゃんのかげおくり』、4年生で『一つの花』、6年生で『平和のとりでを築く』を学びます。6年生は学習の一環として、原爆先生こと池田眞徳先生に原爆体験についてのお話をさせていただきました。6年生の子供たちは、“それほどまで原子爆弾は悲惨だったのだ。”“原爆の恐怖を知った。”“これからは、平和についてもっと話を広げていきたい。”“戦争が戦争を生む。戦争が減ってほしい。そのためにできること、それは小さなケンカをしないことだ。”などと、感想や意見をもつことができました。子供や若者、親世代にも“8月6日はハムの日”としか答えられない人が増えている今の時代に、光っ子たちにも平和についてしっかりと学ばせていくことが大切です。大人や親として、戦争を知らない子供たちに戦争をどう伝えていくか、改めて考えていきたいと思っています。戦後はまだ続いています。今の時代が「戦前」と呼ばれるようにならないことを、心から願っています。